



[PL.3]
 オスカー・フィッシングー
 『ムラッティの行進!』(1934)



[PL.4]
 ノーマン・マクラレン
 『お隣りさん』(1952)

[PL.5]
 上映会「煌ら——陽は傾ぶき 月かげりつも
 くりかえし まみえるものたちへ——」
 (1996年3月29日・30日・31日/
 横浜美術館レクチャーホール) リーフレット

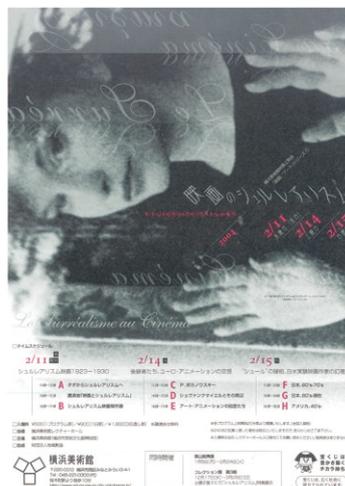


(表面)



(裏面)

[PL.6]
 上映会「映画のシュルレアリスム
 マン・レイからシュヴァンクマイエルまで」
 (2004年2月11日・14日・15日/
 横浜美術館レクチャーホール) リーフレット



(表面)



(裏面)

横浜美術館所蔵の16ミリ映像作品について

松永 真太郎

はじめに

横浜美術館では、絵画、彫刻、版画、写真、工芸など、約1万3千点にのぼる多様な美術品を所蔵している。美術品の収集活動は開館前の1982年から今日まで続くが、そのかたわらで、当館ではもうひとつの「作品収集」がささやかにこなわれていた。16ミリポジフィルムによる映像作品のコレクションである。

当館が16ミリフィルムで保管している映像資料は、美術史や芸術家などをテーマにした教育的趣旨の映像番組（以下、美術映画という）を含めて250タイトル以上にのぼるが、そのうち142タイトルが、「実験映画」あるいは「個人映画」と呼ばれるフィルムアート作品（以下、16ミリ映像作品という）である。それらは、冒頭に述べた美術品のコレクションとは異なる所管・予算枠において収集されたものであるため、当館の所蔵品データベースには登録されておらず、また目録等の形で公開されたこともない。これらのフィルムを上映会や展覧会で上映する際には都度、パンフレットやキャプションに当館所蔵である旨を表記してきたものの、フィルムコレクションの全容については公にする機会を持ちえぬまま現在に至っている。

本稿では、以上のような状況を踏まえ、当館の16ミリ映像作品について、

1. 収集経緯
2. コレクションの内容
3. 活用と保存に関する諸課題

の3章により、状況を整理し、共有することとしたい。

1. 収集経緯

16ミリ映像作品の収集は、当館が開館した1989年度にスタートしている。その収集の実務を担ったのは、「映像担当学芸員」という日本の美術館では他に例のない肩書で当館開設準備室時代から2000年まで在職していた、深田^{ひとり}独氏である。

昨年、当館開館30周年記念誌の作成にあたり、開館当時の職員に在職中の思い出を寄せてもらうこととなり、深田氏からその映像作品の収集の経緯などについてあらためて伺う機会を得た。

氏はそこで、当館が実験映画や個人映画の16ミリフィルムの収集をおこなうに至った要因として以下の4点を挙げた。

- ①当時の映像担当学芸員（筆者注：深田氏自身）がフィルムによる映像表現に強い関心があったこと。
- ②当館の開館（1989年）にともなう「美術情報ギャラリー」^[1]の稼働によって、映像担当学芸員の仕事が一段落したこと。
- ③美術映画の収集予算が当初より計上されていたため、それを原資とできたこと。

[1] 来館者が美術映画等の番組を視聴するスペース。現在ミュージアムショップとCafé小倉山のあるスペースに所在していたが、2005年に閉鎖され、以後その番組は美術情報センター（旧・美術図書室）内の映像ブースで視聴に供している。

④実験映画は学芸部（現・学芸グループ）の所管である美術品の収集活動のなかでは対象とされていなかったこと。

以上の4点に当時の館の状況を補足する形で、当館の開館前後の時期の映像収集をめぐる経緯を以下にまとめてみる。

「当時の映像担当学芸員」すなわち深田氏は、当館の開館準備室時代、一般の学芸員が在籍する「学芸部」ではなく、「美術普及部」（1993年度より「美術学習部」となる）という部署に配属されていた^[2]。深田氏がそこで美術館開館に向けて担った業務が、来館者の視聴に供する美術映画の収集、およびその視聴システムの構築であった。数年のうちに1,000タイトル近くにのぼる美術映画がベータカム、Uマチック等のビデオメディアおよび16ミリフィルムで収集され^[3]、それらを含めた美術に関わる多様な映像・情報を来館者に提供するスペース「美術情報ギャラリー」が当館開館にあわせて開設する。それをもって美術映画の収集活動を縮小し、その予算枠を使って新たに実験映画・個人映画の収集に乗り出した、というのがその大まかな経緯である。「美術映画」の当初の定義である「美術に関する映像」を、「美術としての映像」へといわば概念拡張する格好で、映像作品の収集に舵を切ったわけである。

この時期の日本では、川崎市市民ミュージアム（1988年）や愛知芸術文化センター（1989年）など、活動の射程に映像分野を収め、「映像担当」の肩書をもつスタッフを擁した公的機関が各地に誕生した。また1995年に開館した東京都写真美術館も、「写真」とともに「動く写真」たる映像を対象に含み、フィルム／デジタルを問わず映像作品の収集活動をおこなっている。映像というメディアが存在感を増していき、それとともに他分野との関係づけや文化遺産としての保存の必要性が認知され、全国的にそれが実践に移されつつある時代だったといえよう。

ただし前述の機関は、対象を美術に限定しない複合的ミュージアムか、逆に写真・映像に対象を特化した専門施設である。いわゆる総合美術館での活動としては、当館の映像作品収集は稀有な事例であった。しかしながら、当館の16ミリ映像作品の収集は、日本の多くの博物館施設の例にもれず開館以降徐々に予算が先細りしていき、その映像担当学芸員＝深田氏の退職に際し、後任の補充が無かったこともあり、事実上ストップした。1989年から2000年まで、12年間の収集活動であった^[4]。

[2] 深田氏の在籍した「美術情報課」は、美術図書室をはじめとする美術に関する来館者／市民の学びをバックアップする諸機能（「美術情報センター」と総称）を所管していた。

[3] そのなかには、「横浜ゆかり作家シリーズ」をはじめとする当館のオリジナル映像番組約30タイトルも含まれる。

[4] ただし深田氏の退職から2年後に後任となった筆者が窓口となり、別の予算枠を使って石田尚志『部屋／形態』（1999）、辻直之『闇を見つめる羽根』（2003）・『3つの雲』（2005）の3タイトルを2005年度に購入している。

2. コレクションの内容

美術館・博物館における収集活動は原則として「収集方針」に則っておこなわれる。当館の美術品の収集も同様であるが、この16ミリ映像作品の収集については厳密な指針や収集対象が規定されていなかった。その収集内容について、実際にコレクションされた作品の性格に照らして規定するならば、「フィルムをメディアに用いた個人（または少人数の集団）による表現のうち、技術面や表現内容において独自性や先駆性の認められる作品」ということになる。

コレクションの規模は大きく異なるが、国立映画アーカイブ（旧・東京国立近代美術館フィルムセンター）を収集対象の設定に関する比較例として挙げる。同館は、戦後から長きにわたり映画フィルムの収集保存活動を続ける国立機関であり、劇場用映画やマスメディアの制作物を中心とした広範な映像文化遺産を射程に収めている。その膨大な所蔵フィルムは「劇映画」「文化・記録映画」「アニメーション映画」「ニュース映画」「テレビ用映画」の5つの形式／ジャンルに区分されているが、そこに「実験映画」や「個人映画」というカテゴリーは存在しない。一方、当館の16ミリ映像作品の多くは、形式やジャンルでは容易にカテゴライズできない性格を有しており、上記の区分の最初の3つのいずれかに収めうる作品もあれば、どこにも収めがたい作品もある。また、当館の映像コレクションは前提として、個人（少人数）の創作物を対象としており、巷の劇場で一般公開されるような商業性の高い映画は含まれていない。そこにも国立映画アーカイブの収集趣旨との相違が明らかである。

当館の16ミリ映像作品の収集活動の趣旨をまとめれば、「個人が自己表現の手段として制作したもののうち芸術表現としての高い価値が認められる作品について保存し、調査・研究・公開に資する活動」となろう。そう定義しなおせば、これが一般的な美術館における美術品収集活動の趣旨と同義であることが理解できる。そして、まさにその点において他のフィルム収蔵機関との差別化がなされてきたともいえよう。

以下が、そのコレクションの一覧である^[5]。

[5] 本稿では詳述しないが、深田氏は、16ミリフィルムの映像作品と並行して、同時代（90年代）のビデオアート作品も収集しており、ベータカムを中心に18点がフィルムコレクションとは別に存在する。

横浜美術館所蔵16ミリ映像作品一覧

- ・作品は国外作家（58タイトル）、国内作家（84タイトル）に分け、国外作家は作者名のアルファベット順、国内作家は作者名の五十音順で掲載した。
- ・メディアはすべて16ミリポジフィルムである。同時期に収集されたビデオアート作品はここには含まない。

[国外作家]

no.	作者名	作者原名	作品名	原題 / 英題	制作年	時間(分)
1	アレクセイエフ、アレクサンダー & パーカー、クレア	ALEXEIEFF, Alexander & PARKER, Clair	禿山の一夜	Une nuit sur le mont chauve	1933	8
2	アンダーセン、トム	ANDERSEN, Tom	エドワード・マイブリッジ：ゾーアプラクソグラファー	Eadweard Muybridge: Zoopraxographer	1976	60
3	アンガー、ケネス	ANGER, Kenneth	スコピオ・ライジング	Scorpio Rising	1963	29
4	ベイリー、ブルース	BAILLIE, Bruce	オール・マイ・ライフ	All My Life	1966	3
5	ブラッケージ、スタン	BRAKHAGE, Stan	ドッグ・スター・マン；プレリュード	Dog Star Man; Prelude	1961	25
6	ブラッケージ、スタン	BRAKHAGE, Stan	モスライト	Mothlight	1963	4
7	ブリア、ロバート	BREER, Robert	69	69	1968	5
8	ブニュエル、ルイス	BUNUEL, Luis	アンダルシアの犬	Un Chien Andalou	1928	16
9	コナー、ブルース	CONNER, Bruce	A MOVIE	A MOVIE	1957	12
10	コンラッド、トニー	CONRAD, Tony	フリッカー	The Flicker	1966	30
11	カズン、シャロン	COUSIN, Sharon	ローズブラッド	Roseblood	1974	7
12	デレン、マヤ & ハミッド、アレクサンダー	DEREN, Maya & HAMID, Alexander	午後の網目	Meshes of the Afternoon	1943	14
13	デュシャン、マルセル	DUCHAMPS, Marcel	アネミック・シネマ	Anemic Cinema	1926	7
14	エジソン・カンパニー	EDISON, Co.	1890年代の映画 アンソロジー	Films of the 1890s	1894-99	18
15	エゲリング、ヴィキング	EGGELING, Viking	対角線交響楽	Diagonal Sinfonie	1923-25	6
16	フィッシング、オスカー	FISCHINGER, Oskar	ムラッティの行進！	Muratti Greift Ein!	1934	3
17	フラハティ、ロバート	FLAHERTY, Robert	極北のナヌーク	Nanook of the North	1922	64
18	ジャニキアン、イェルバン & ルッキ、アンジェラ	GIANIKIAN, Yervant & LUCCHI, Angela Ricci	南極から赤道まで	Dal polo all'equatre	1987	96
19	グレゴワール、ノーマンド	GREGOIRE, Normand	通過	Passage	1974	6
20	ハイン、W.+B.	HEIN, W.+B.	ロー・フィルム	Roh Film	1968	20
21	ハットン、ピーター	HUTTON, Peter	ニューヨーク・ポートレート	New York Portrait Part 1	1976-78	15
22	ヤネツコ、クリストフ	JANETZKO, Christoph	S1	S1	1985	15
23	ホードマン、コ	HOEDMAN, Co	砂の城	Sand Castle	1977	13
24	コブラン、ケン	KOBLAND, Ken	玄関	VESTIBULE (IN 3 EPISODES)	1978	20
25	ランドウ、ジョージ (オーウェン)	LANDOW, George(Owen)	スプロケットホール、エッジレタリング、ゴミなどがあられるフィルム	Film in Which There Appear Sprocket Holes, Edge Lettering, Dirt Particles,etc.	1965/66	4
26	ラーチャー、デイヴィッド	LARCHER, David	おばあちゃんのもの	Grannys' Is	1989	48
27	ローダー、スタンディッシュ	LAUDER, Standish	ランナウェイ	Runaway	1969	6
28	ロックハート、シャロン	LOCKHART, Sharon	Goshogaoka	Goshogaoka	1997	63
29	リュミエール、ルイ	LUMIERE, Louis	リュミエール初期シネマトグラフ集	Early Cinematographe by Lumiere	1895	3
30	ライ、レン	LYE, Len	トレード・タトゥー	Trade Tatto	1937	5
31	マース、ウィラード	MAAS, Willard	身体の地理学	The Geography of the Body	1943	8

no.	作者名	作者原名	作品名	原題 / 英題	制作年	時間 (分)
32	マルティン、カトリーナ	MARTIN, Katrina	HANAFUDA	HANAFUDA	1981	30
33	マクラレン、ノーマン	MCLAREN, Norman	ペン先の音	Pen Point Percussion	1951	6
34	マクラレン、ノーマン	MCLAREN, Norman	お隣さん	Neighbours	1952	8
35	マクラレン、ノーマン	MCLAREN, Norman	ブリンクティ・ブランク (線と色の即興詩)	Blinkity Blank	1955	5
36	メカス、ジョナス	MEKAS, Jonas	リトアニアへの旅の追憶	Reminiscences of Journey to Lithuania	1972	82
37	メリエス、ジョルジュ	MELIES, Georges	月世界旅行	La voyage dans la lune	1902	14
38	モンマルツ、ルツ	MOMMARTZ, Lutz	自己撮影	Selbstschüsse	1967	7
39	モーリス、フランク & キャロライン	MOURIS, Frank & Caroline	フランク・フィルム	Frank Film	1973	9
40	ネケス、ヴェルナー	NEKES, Werner	フィルム・ビフォー・ フィルム	Film Before Film; Was Geschah Wirklich Zwischen Den Birdern?	1985	83
41	ノヘース、ドミニク	NOGUEZ, Dominique	人生	Una Vita	1984	5
42	O.、ドーレ	O., Dore	KASKARA	KASKARA	1974	21
43	オニール、パット	O'NEILL, Patt	ソーガス・シリーズ	Saugus Series	1974	18
44	ピット、スーザン	PITT, Suzan	アスパラガス	Asparagus	1974-78	18
45	ライニガー、ロッテ	REINIGER, Lotte	蟻とキリギリス	The Glasshopper and the Ant	1954	11
46	リチャー、ドナルド	RICHIE, Donald	猫と少年	Boy with Cat	1962	4
47	リチャー、ドナルド	RICHIE, Donald	五つの哲学的寓話	Five Philisophical Fables	1967	50
48	リヒター、ハンス	RICHTER, Hans	午前のお霊	Ghosts Before Breakfast	1928	7
49	ローズ、ピーター	ROSE, Peter	遠くを見られない男	The Man Could Not See Far Enough	1981	33
50	シャリッツ、ポール	SHARITS, Paul	T,O,U,C,H,I,N,G	T,O,U,C,H,I,N,G	1968	12
51	スノウ、マイケル	SNOW, Michael	波長	Wavelength	1967	45
52	ソンバート、ウォーレン	SOMBERT, Warren	カップ&リップ	The Cup & the Lip	1986	20
53	サイヴァン、コリーン	SULLIVAN, Colleen	バッファロー・ワン、 バッファロー・トゥー、...	Buffalo One, Buffalo Two,...	1985	15
54	スウィーニー、モイラ	SWEENEY, Moira	イマジナリー	Imaginary	1988-89	18
55	サズ、エヴァ	SZASZ, Eva	コズミック・ズーム	Cosmic Zoom	1968	8
56	ヴァンダービーク、スタン	VANDERBEEK, Stan	サイエンス・フリクション	Science Friction	1959	9
57	ヴェルトフ、ジガ	VERTOV, Dziga	カメラを持った男	The Man with the Movie Camera	1929	66
58	ホイットニー、ジェームズ	WHITNEY, James	ラピス	Lapis	1963/66	10

横浜美術館所蔵16ミリ映像作品一覧

[国内作家]

no.	作者名	作者英名	作品名	英題	制作年	時間(分)
1	相原 信洋	AIHARA, Nobuhiro	映像	Image (Shadow)	1987	8
2	安藤 紘平	ANDO, Kohei	オー！マイ・マザー	Oh! My Mother	1969	10
3	安藤 紘平	ANDO, Kohei	通り過ぎる電車のように	Like a Passing Train	1978	3
4	安藤 紘平	ANDO, Kohei	通り過ぎる電車のように II	A TRAIN (Like a Passing Train II)	1979	6
5	安藤 紘平	ANDO, Kohei	私の蒐集物	My Collections	1988	8
6	石井 秀人	ISHII, Hideto	家・回帰	Home, Returning	1984	18
7	石田 純章	ISHIDA, Sumiaki	TOKIO HOUSE	Tokio House	1990	7
8	石田 尚志	ISHIDA, Takashi	部屋／形態	Gestalt	1999	7
9	出光 真子	IDEMITSU, Mako	AT YUKIGAYA 2	At YUKIGAYA 2	1974	11
10	伊藤 高志	ITO, Takshi	SPACY	SPACY	1981	10
11	上田 祥晴	UEDA, Yoshiharu	DANCE	Dance	1992	7
12	歌川 恵子	UTAGAWA, Keiko	みみのなかのみず	Water in My Ears	1994	36
13	江口 幸子	EGUCHI, Yukiko	MaMa	MaMa	1987	49
14	大林 宣彦	OBAYASHI, Nobuhiko	EMOTION=伝説の午後・いつか見たドラキュラ	Emotion	1967	39
15	大林 宣彦	OBAYASHI, Nobuhiko	Complexe 微熱の玻璃あるいは悲しい鱗舌ワルツに乗って葬列の散歩道	Complexe	1964	15
16	奥村 昭夫	OKUMURA, Akio	猶予もしくは影を撫でる男	Postponement, or the man who stroked his own shadow	1967	27
17	奥山 順市	OKUYAMA, Jun'ichi	映画・LE CINEMA	Le cinema	1975	5
18	奥山 順市	OKUYAMA, Jun'ichi	我が映画旋律	My Movie Melodies	1980	6
19	加藤 到	KATO, Itaru	フェード・アウト 2	Fade Out 2	1980	9
20	金井 勝	KANAI, Katsu	無人列島	The Deserted Archipelago	1969	56
21	上岡 文枝	KAMIOKA, Fumie	親不知	A Wisdom Tooth	1993	7
22	上岡 文枝	KAMIOKA, Fumie	冬虫夏草	Cordyceps Sobolifera	1994	26
23	上岡 文枝	KAMIOKA, Fumie	衍-海月の塔にて-	Echo; From Tower of Jellyfish	1995	23
24	河瀬 直美	KAWASE, Naomi	につつまれて	Like Air	1992	40
25	河瀬 直美	KAWASE, Naomi	かたつもり	KATATSUMORI	1994	40
26	河瀬 直美	KAWASE, Naomi	杣人物語	The Weald	1997	73
27	かわなかのぶひろ	KAWANAKA, Nobuhiro	私小説Ⅲ	ShishousetsuⅢ	1989	21
28	かわなかのぶひろ	KAWANAKA, Nobuhiro	私小説	Shishousetsu	1996	103
29	かわなかのぶひろ、萩原 朔美	KAWANAKA, Nobuhiro & HAGIWARA, Sakumi	映像書簡 1	Correspondence	1979	25
30	かわなかのぶひろ、萩原 朔美	KAWANAKA, Nobuhiro & HAGIWARA, Sakumi	映像書簡 2	Correspondence 2	1980	39
31	かわなかのぶひろ、萩原 朔美	KAWANAKA, Nobuhiro & HAGIWARA, Sakumi	映像書簡 3	Correspondence 3	1981	33
32	かわなかのぶひろ、萩原 朔美	KAWANAKA, Nobuhiro & HAGIWARA, Sakumi	映像書簡 4	Correspondence 4	1982	48
33	かわなかのぶひろ、萩原 朔美	KAWANAKA, Nobuhiro & HAGIWARA, Sakumi	映像書簡 5	Correspondence 5	1994	20
34	かわなかのぶひろ、萩原 朔美	KAWANAKA, Nobuhiro & HAGIWARA, Sakumi	映像書簡 6	Correspondence 6	1995	30
35	かわなかのぶひろ、萩原 朔美	KAWANAKA, Nobuhiro & HAGIWARA, Sakumi	映像書簡 7	Correspondence 7	1996	31
36	上林 栄樹	KANBAYASHI, Hideki	肖像集	Portraits	1982	50
37	具志堅 剛	GUSHIKEN, Tsuyoshi	たたかう兎	Tatakau-Usagi	1992	42
38	黒坂 圭太	KUROSAKA, Keita	みみず物語	Worm Story	1989	15
39	小口 詩子	KOGUCHI, Utako	おでかけ日記	O-DE-KA-KE Diary	1988	47
40	小口 詩子	KOGUCHI, Utako	続・おでかけ日記～第2章～草の家	O-DE-KA-KE Diary Part 2 -The Home of Grass	1992	50
41	小口 詩子	KOGUCHI, Utako	眠る花	The Sleeping Flower	1992	7
42	居田 伊佐雄	KOTA, Isao	オランダ人の写真	Dutchman's Photographs	1976	7
43	居田 伊佐雄	KOTA, Isao	影踏み	Step on the Shadow	1983	15

no.	作者名	作者英名	作品名	英題	制作年	時間(分)
44	才木 浩美	SAIKI, Hiromi	あながちまちがってるとも いえない空	The Place Which Isn't Necessarily Wrong	1996	18
45	才木 浩美	SAIKI, Hiromi	ディシプリン	Discipline	1997	13
46	齋藤 ユキエ	SAITO, Yukie	行き暮れども待ち明かす	Benighted But Not Begun	1994	22
47	城之内 元晴	JONOUCHI, Motoharu	WOLS	WOLS EXHIBITION NO.1	1969	18
48	鈴木 志郎康	SUZUKI, Shiroyasu	日没の印象	Impression of Sunset	1975	24
49	鈴木 志郎康	SUZUKI, Shiroyasu	草の影を刈る	Harvesting Shadows of Grass	1977	200
50	鈴木 志郎康	SUZUKI, Shiroyasu	あじさいならい	Imitating the Flower of Hydrangea	1985	50
51	鈴木 志郎康	SUZUKI, Shiroyasu	角の辺り	Sometimes, at the Exclusive Point,..	1995	15
52	瀬尾 俊三	SEO, Shunzo	フィルム・ディスプレイ	Film Display	1979	5
53	田名網 敬一	TANAAMI, Keiichi	仮面のマリオネットたち	Masked Marionettes	1965	8
54	田名網 敬一	TANAAMI, Keiichi	幼視景-序説	Infantile Landscape- Prolog	1978	12
55	谷川 俊太郎	TANIKAWA, Shuntaro	休憩	Rest	1977	3
56	谷川 俊太郎、 武満 徹	TANIKAWA, Shuntaro & TAKEMITSU, Toru	X	X (batsu)	1960	15
57	辻 直之	TSUJI, Naoyuki	闇を見つめる羽根	A Feather Stare at the Dark	2003	17
58	辻 直之	TSUJI, Naoyuki	3つの雲	Trilogy about Clouds	2005	13
59	勅使河原 宏	TESHIGAWARA, Hiroshi	アントニー・ガウディー	Antony Gaudi	1984	72
60	手塚 眞	TEZUKA, Makoto	MODEL	Model	1987	9
61	寺山 修司	TERAYAMA, Shuji	檻囚	The Cage	1969	11
62	中村 雅信	NAKAMURA, Masanobu	アナザー・ライフ	Another Life	1976	11
63	日本大学芸術学部映画研究会 (平野 克己)	Nihon University Film Study Club (HIRANO, Katsumi)	釘と靴下の対話	Conversation Between Nail and Socks	1958	30
64	日本大学芸術学部新映画研究会 (足立 正生)	Nihon University Film Study Club (ADACHI, Masao)	鎖陰	Closed Vagina	1962	54
65	萩原 朔美	HAGIWARA, Sakumi	KIRI	KIRI	1972	8
66	原 将人	HARA, Masato	おかしさに彩られた悲しみの バラード	Contradiction	1968	13
67	原田 一平	HARADA, Ippei	連続四辺形	Continuous Rectangles	1987	14
68	原田 一平	HARADA, Ippei	これまでのあらすじ	To Sum Up	1996-98	30
69	原田 一平	HARADA, Ippei	第2話 (これまでのあらすじ2)	To Sum Up; Episode 2	1997	23
70	原田 一平	HARADA, Ippei	第3話 (これまでのあらすじ3)	To Sum Up; Episode 3	1998	29
71	昼間 行雄	HIRUMA, Yukio	放送室	Hososhitsu	1986	15
72	藤野 一友、 大林 宣彦	FUJINO, Kazutomo & OBAYASHI, Nobuhiko	喰べた人	An Eater	1963	23
73	細江 英公	HOSOE, Eiko	へそと原爆	Navel and A-Bomb	1960	14
74	松本 俊夫	MATSUMOTO, Toshio	石の詩	Song of Stones	1963	25
75	松本 俊夫	MATSUMOTO, Toshio	ATMAN	ATMAN	1975	12
76	三浦 淳子	MIURA, Junko	孤独の輪郭	A Potrait Solitude	1996	53
77	森下 明彦	MORISHITA, Akihiko	Xerophilie	Xerophilie	1985	11
78	山崎 博	YAMAZAKI, Hiroshi	ヘリオグラフィー	Heliography	1979	5
79	山田 勇男	YAMADA, Isao	巻き貝の扇	Ammonite's Fan	1983	12
80	横尾 忠則	YOKOO, Tadanori	堅々嶽夫婦庭訓	Kachikachiyama meotonosujimichi	1964	8
81	吉田 公子	YOSHIDA, Kimiko	ままん	MAMAN	1992	21
82	与那覇 政之	YONAHA, Masayuki	ゆらぎの憧憬	Streams	1998	20
83	和田 淳子	WADA, Junko	アスレチック No.3	Exercise March	1995	8
84	和田 淳子	WADA, Junko	桃色ベビーオイル	Peach Baby Oil	1995	16

便宜的に、上記リストの142タイトルを時代別に区分すると、以下のようになる。

- ①映画黎明期から第二次大戦までの欧米のアヴァンギャルドシネマ：14タイトル
- ②第二次大戦後のアンダーグラウンドシネマ以降の欧米の実験映画：44タイトル
- ③日本における前衛の時代（戦後から1970年代まで）の実験映画：31タイトル
- ④日本における今日（1980年代以降）の個人映画：53タイトル

そのラインナップには、時代的・地域的なバランスの欠如や歴史的な重要作家（作品）の欠落が各所に散見される。もとより、映像メディアの誕生と同時に生まれたとっていい個人映画・実験映画の歴史を、150タイトルに満たない作品によって網羅しえないことは指摘するまでもない。

とはいうものの、当館のフィルムコレクションは、実写とアニメーション、フィクションとドキュメンタリー、そしてそのいずれにも括りがたいものを含んだ、極めて幅広い傾向の作品で構成されており、コレクション総体から浮かび上がるその多様性や領域横断的性格自体が、実験映画・個人映画の本質を映し出している。映像史的な観点からみれば、映画草創期のエジソン、リュミエールのフィルムを起点としつつ、そこから「劇映画」へと発展していくメインストリームとは異なる（あるいはその流れに反駁する）「もうひとつの映画史」、すなわち、両大戦間にヨーロッパで隆盛したアヴァンギャルドシネマを経て、第二次大戦後のアメリカを中心としたアンダーグラウンドシネマ、同時期の日本の実験映画、そして現代のフィルムアートの所産にいたる、「動く写真」をめぐる100年余の実験の足跡を大まかにたどれるものだといいだろう。

コレクションの内容にもう少し踏み込んで、その特色をいくつか挙げてみる。

上記の①から③は、すでに映画史のなかで一定の評価をあたえられた歴史的な作品群が占める。①のうち、マルセル・デュシャン『アネミック・シネマ』（1926）(fig.2)、ハンス・リヒター『午前の幽霊』（1928）、ルイス・ブニュエル『アンダルシアの犬』（1928）、あるいはマヤ・デレン&アレクサンダー・ハミッド『午後の網目』（1943）(fig.3)といった作品群は、映画史的にもさることながら、美術との接点、とりわけ当館の美術品収集のひとつの核であるダダとシュルレアリスムの系譜上の重要な参照項である。また、その前衛映画の潮流を汲む第二次大戦後のアメリカや日本の映像作家の作品群（上記②③）についても、シュルレアリスム的傾向を色濃く留めるもののほか、ネオダダ、ポップアート、ミニマルアート、コンセプチュアルアートといった様々な同時代のアートの潮流との呼応が顕著にうかがえ、実験映画とファインアートとの不可分な関係性を明らかにしている。

コレクションにはまた、いわゆるアート・アニメーションの作品も多く含まれる。オスカー・フィッシーガー [PL.3] (p.7) やレン・ライといったパイオニアから、ピンスクリーンという



fig.1
16ミリ映像作品の保管状態

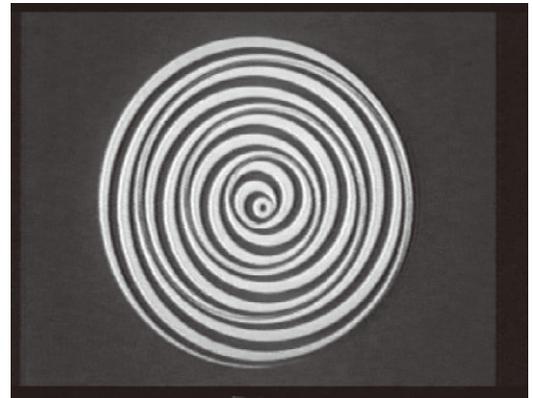


fig.2



fig.3

独創的な技法で知られるアレクサンダー・アレクセイエフ&クレア・パーカー、CGアニメーションの先駆者であるホイットニー兄弟、NBF（カナダ）のノーマン・マクラレン [PL.4] (p.7) やコ・ホードマン、そして田名網敬一や相原信洋ら日本の作家も含め、歴史的に重要な作品を通して、「アニメーション」の手法の多様性、そのすそ野の広さが理解されよう。

一方、上記④の作品の多くは、発表されて間もない時期に収集された作品、つまり当時「新作」だったものである。それらは、深田氏が「イメージフォーラム・フェスティバル」をはじめとする個人映画系の映画祭や上映会を通して現代の映像作家のリサーチを重ね、そのなかから選ばれたものであろう。その中心を占めているのが、1970年代半ばに隆盛し、90年代前後に一世を風靡したいわゆるプライベート・ドキュメンタリー^[6]の系譜に属する作品群である。

日本を代表する映画監督である河瀬直美もまた、そのプライベート・ドキュメンタリーに出自をもつ作家である。河瀬は短編映画『につつまれて』(1992)、『かたつもり』(1994)の2作が山形国際ドキュメンタリー映画祭でそれぞれ賞を得たのち、初の長編劇映画『萌の朱雀』(1997)のカンヌ映画祭カメラドール賞受賞により一躍国際的な映画監督となったが、深田氏はメジャーデビュー前の時点で河瀬の創作活動に注目し、1994年とその翌年に上記2作を作家から直接購入してそのフィルムコレクションに加えている。95年には、その2作を含めた河瀬作品の特集上映が当館レクチャーホールで催された^[7] [PL.5] (p.7)。このときの河瀬作品の購入は、作家にとって経済的に、そしてそれ以上に精神的に大きな支えとなったようで、後年筆者が河瀬氏に面会した際、氏は真っ先に横浜美術館と深田氏による映像作品収集活動に対する謝意をのべた。当館が近年標榜している若手作家支援活動の嚆矢であり、その支援が実を結んだひとつの事例といえよう。

3. 活用と保管に関する諸課題

当館の16ミリ映像作品をめぐるのは、その活用や保管にかかわる課題が少なくない。それらは当館固有の問題というより、フィルムメディアや映像作品を扱う多くの機関に共通するものであろう。個別に詳述するには紙幅も筆者の知識も十分でないため、ここでは実験映画（あるいはフィルムメディア）を扱う上で直面する困難や問題点を列挙し、課題提起するに留める。

一般的に、美術館（博物館）における作品・資料の「収集」には、それを「公開」する使命がつきまとう。当館の16ミリ映像作品についても、その理念にもとづき、収集スタートの翌年（1990年）から年2回のペースでテーマ上映会が催されるようになった^[8]。作品の収集と連動したこの上映事業もまた、90年代の日本の美術館として先駆的な活動であったといえる^[9]。また、深田氏の退職の2年後（2003年）に着任した筆者も

[6] 作者の私生活や家族をモチーフにした私的記録映画。セルフ・ドキュメンタリー、あるいは私映画、日記映画とも呼ばれる。その先駆となったのはジョナス・メカス『リトアニアへの旅の追憶』(1972)であり、日本では鈴木志郎康の『日没の印象』(1975)（両作とも当館のコレクションに含まれている）を嚆矢として個人映画にひとつの潮流を生み出した。

[7] なお、この上映会に際して河瀬と8ミリフィルムによる往復書簡を共同制作し、またトークショーで河瀬の対談相手として出演したのは、『幻の光』(1995)で劇場用長編作品デビューを果たす直前の是枝裕和であった。

[8] この定期上映会は、深田氏の所属する美術学習部美術情報課と総務部事業課という二つの部署の共同で実施されていた。開館当時セクショナリズムの傾向が顕著であった横浜美術館において、部署間での連携は画期的なことだったという。

[9] その当時、鳥根県立美術館の開館準備室に在職していた筆者も、ホールでの上映活動を検討するにあたり、そのリサーチのため横浜美術館の深田氏を訪ね、ヒアリングをおこなったことがある。鳥根県立美術館開館後、実際に筆者の企画による上映会が定期的な実施され、実験映画の上映に際しては深田氏を講師として招いた。

その活動を引き継ぎ、「映画／アートシリーズ」と題した年1回の定期上映会〔PL6〕(p.7)に加え、展覧会とのタイアップによる上映会を毎年数回実施していた。しかし集客面においては、慢性的に苦戦してきたことは否めない。実験映画・個人映画には一定のコアな需要層が存在するものの、そのパイは大きくない。大規模展覧会とのタイアップなど特別な仕掛けによってコア層以外にまで遡及できない限り、当館レクチャーホールの240席を埋めるのは至難である。

上映内容についても、当館のフィルムコレクションのみでは設定しえるテーマのバリエーションに限界が生じる。上映会を継続していくなかで、多様なテーマに結びつきやすい特定の作品の上映機会が増えてしまう傾向もみられた。コア層であっても、同じ作品の上映に繰り返し足を運ぶ人は稀である^[10]。プログラムの充実や集客力向上のために外部からの借用フィルムを多く盛り込む必要も生じ、事業経費的にも負荷がかかっていった。外部機関との連携によりフィルムの無償貸借ができれば、プログラム編成や集客面での可能性が広がるが、当館の16ミリ映像作品の大多数は、購入時の契約条件により、原則として他機関への貸出ができない。また、この手の映像作品を所蔵している公的機関や民間団体は横のつながりが概して希薄で、またその所蔵品リストを公開していない機関も多く（当館がよい例であるが）、作品の所在を確認すること自体に困難をとまなう^[11]。

そのような多面的な問題を抱えつつ継続してきた映画上映会は2006年、指定管理者制度の導入にともなう予算削減を契機にその事業枠自体が撤廃された^[12]。現在では、横浜トリエンナーレなどの関連企画として不定期に実施される上映会、あるいは当館で1998年以降毎年開催してきた「イメージフォーラム・フェスティバル」の一枠を使った当館所蔵フィルムの上映プログラムなど、他の事業枠のなかに組み込む形でかろうじて上映機会を確保する状況となっている。

ビデオ（デジタル）作品であれば、「上映会」というイベントの形式をとらず、視聴ブースでの提供や展示室でのループ上映といった別の公開方法がある。しかしフィルムにおいては、映写技師の必要性、連続上映によるフィルムの消耗・劣化といった問題があり、また権利関係上フィルムのデジタル化も自由にはできないため、ホールでの上映会という形式以外に公開の場を設けることが困難である。ただし近年、パブリックドメインとなった（主に戦前期の）作品を順次デジタル化し、当館の「コレクション展」で絵画や写真作品のかたわらにモニター（ないしプロジェクター）を設置しループ上映することも多くなってきている。

上映機器についても問題を抱えている。当館のレクチャーホールに設置されている16ミリ大型映写機は、定期上映会が休止してのち定期メンテナンスが行われていない。上映中にいつトラブルが発生するかわからない、あるいは上映自体がいつできなくなってもおかしくない状態にある。そして仮に映写機が故障した際も、機材の製造がすでに終了しているため交換部品が市場から消えつつあり、修理不能となる危険性が日々高まっている。上映できる環境が整っていなければ、コレクション自体の存在意義が問われる。フィルムの収集・保存をおこなうにあたっては、同時に「機材の保存」という課題にも取り組まなければならないのである^[13]。

[10] 同一の作品を何度も鑑賞に供するという意味では常設展示（コレクション展）も同様であるが、映像の鑑賞には上映時間分の拘束がともなう点で、鑑賞にかかる時間を鑑賞者の意志に委ねられる絵画や彫刻と異なり、繰り返しの公開には不向きな面がある。

[11] その課題に向き合う活動の事例として、2015年に発足したアメリカの非営利団体「Collaborative Cataloging Japan (CCJ)」がある。同団体は、戦後（1950年代後半から1970年代）の日本の実験映画・ビデオ作品を所蔵する公的機関や個人コレクションと共同し、それらのコレクションアーカイブの公開を目指して、メタデータの蓄積とデータベースの構築をおこなっている。

[12] 同時に筆者の「映像担当学芸員」という職名から「映像担当」の文字が消え、「学芸員」として現・学芸グループに配属替えとなった。

[13] さらに昨今では、フィルムメディア自体が存続の危機に瀕している。先行して「淘汰」されていった8ミリフィルムに続き、16ミリについても大手メーカーのひとつが生産中止を発表し、現在ではコダックがフィルムの生産を続ける唯一のメーカーとなっている。

さて、言うまでもなくフィルムとは複製メディアであり、当館所蔵の16ミリフィルムもすべて「複製品」である^[14]。写真作品や版画作品も同じく複製メディアであるが、この種の映画フィルムがそれらと異なる点は、ほとんどの場合エディションが設定されないことである。それはつまり、作家や権利継承者が保管するオリジナルネガやマスターポジから（場合によっては複製されたポジフィルムからも）無数の複製フィルムの生産が可能ということであり、また複製されて巷に出回っているフィルムの数の確認が不可能ということである。一般に、作品の「価値」の判断には、そのモノ自体の希少性が基準のひとつとなるが、これらのフィルムに関しては、その希少性の不確かさゆえに価値づけが困難であるという問題が存在している。

しかし、制作から数十年を経たそれらの映像作品のなかには、ネガやポジの劣化や損傷、あるいはそれ自体が行方不明になることにより、結果として当館所蔵のフィルムが現存するうちもっともコンディションの良い、貴重なものとなるケースも出てきている。その例として横尾忠則がキャリア初期に制作したアニメーション作品『かちかちやまめおとのすじみち堅々嶽夫婦庭訓』（1964年）や、日本実験映画史に名を刻む「日大映研」が制作した『釘と靴下の対話』（1958年）と『さいん鎖陰』（1962年）が挙げられる。いずれも後年、制作者ないし権利所有者がデジタル版やリマスターフィルムを作成するにあたり、状態の良いフィルムが他になかったため、当館所蔵のフィルムが元素材として使用された事例である。

当館の16ミリフィルムは幸い、現時点でも良好なコンディションを保っている。しかしその「保管庫」は一般的な事務室に準じた空調設備であり、湿度のコントロールができず、フィルムの保存環境としては芳しくない。急激な湿度変化が繰り返された場合、いわゆるビネガーシンドローム^[15]が突然発生する事態もありえる。目下、2021年度に控えた当館の改修工事にあたってフィルムを温湿度調整可能な場所に移動すべく計画中であるが、フィルムの保存において一般に推奨される「温度10℃以下／湿度2～5%」の低温低湿度保管庫の新設は現実的（予算的）に難しく、改修後も引き続き課題として残るだろう。

[14] なお当館の16ミリ映像作品には、オリジナルのフィルム形式とは異なるものがいくつか含まれている。戦前期の映画のほとんどは35ミリで、また戦後の個人映画のいくつかは8ミリ（シングル8やスーパー8）で撮影・編集された作品である。当館のコレクションにおいては、実験映画・個人映画の主力メディアであり、取扱いも比較的簡便な16ミリに規格を統一し、異なるフィルム形式の作品は16ミリに変換したものを購入していた。

[15] アセチルセルロースが湿気や熱によって化学変化を起こす症状。強い酢酸臭を発生し、フィルムの場合は筒状に変形したり、ひび割れを起こしたりするほか、粉々に砕ける事例も確認されている。

おわりに

以上、本稿では当館の16ミリ映像作品の概要について、その収集経緯や現状の課題を含めて述べてきたが、ひるがえって現代アートにおける「映像」の立ち位置を俯瞰してみると、2000年代以降その状況は劇的に変化してきている。画家、写真家、インスタレーション作家といった肩書を問わず、あらゆるアーティストが気軽に映像作品の制作、あるいは映像メディアをともなう作品制作に取り組むようになった。その作品のほとんどはフィルムではなくデジタル映像で制作され、またシアター空間で「上映」される映画としてではなく、ギャラリー空間などで「展示」される美術作品としての性質が付与されている^[17]。

その状況に呼応するように、当館の美術品収集においても、収集分野のひとつである「写真」を2008年度から「写真・映像」と名称変更し、自覚的に映像作品を収集対象に含めるようになった。近年では毎年のようにデジタル素材の「映像作品」が当館の美術品コレクションに加えられている。それに対して、当館の16ミリ映像作品はいまなお、収集当時のまま美術情報センターの管理する資料の一部でありつづけ、館活動のなかで文字通り「所在ない」存在となっている。

本稿で述べたように、この映像作品コレクションは趣旨のうえでは「美術品」と本質的に変わらず、本来、当館の所蔵品データベースのなかに加えられてしかるべきものだろう。本稿の執筆を足掛かりとして、近い将来この一連の映像作品を当館の所蔵品に登録すべく、必要な調査と手続きを進めていきたい。

(横浜美術館主任学芸員)

[17] ただし映像表現をめぐる昨今の状況をより俯瞰的にみれば、シアターでの映画上映や映像作品の展示よりもはるかに活発な「発表」が行われている場所はまぎれもなく、インターネットのなかである。

16-Millimeter Film Works in the Yokohama Museum of Art's Collection

Matsunaga Shintaro

(Curator, Yokohama Museum of Art)

The Yokohama Museum of Art has in its collection a total of 142 works on 16-mm film. These are works of film art, known variously as “experimental films” or “films produced by individuals” (referred to below as “16-millimeter film works”). As they were acquired within a separate administrative and budgetary framework from artworks in the collection such as paintings and sculptures, they are not registered in the database of the museum’s holdings, nor is a catalogue or other record of the works available to the public. With these circumstances in mind, the objective of this paper is to organize and share information on the acquisition process, content, and issues relating to 16-millimeter film works possessed by the museum.

For information on the contents of the collection, which is being made public for the first time, please refer to the list on pp. 52-55.

Part 1 of the paper summarizes the history of the museum’s acquisition of 16-millimeter film works based on interviews with Fukada Hitori, who was in charge of the acquisition.

Prior to the museum’s opening, Fukada was employed by the planning office as “curator for film,” an unprecedented title at a Japanese art museum. Initially, he primarily collected art-related educational programs, but after the museum’s opening in 1989 he expanded the scope of acquisitions to include experimental films and films produced by individuals, and continued collecting until his retirement in 2000. At the time public institutions that stated acquisition of film works as part of their scope of collecting activities, such as the Kawasaki City Museum and the Tokyo Photographic Art Museum, had opened in various locations around Japan, but the Yokohama Museum of Art’s activities in this field were a first among so-called general art museums.

Next, in Part 2, this paper presents an overview and describes the distinctive characteristics of the 16-millimeter film collection.

Although there is no clear stipulation of the scope of the museum’s 16-millimeter film acquisitions, a summary based on the actual collection would be something like “works in the medium of film that are unique or groundbreaking in terms of technology or content of expression, and were produced by individuals (or small groups).” The following is a rough breakdown of the 142 works in the collection.

- (1) Western avant-garde films from the dawn of cinema through World War II: 14 titles
- (2) Western experimental films from the post-World War II underground cinema era and after: 44 titles
- (3) Japanese experimental films from the nation’s avant-garde era (post-World War II through the 1970s): 31 titles
- (4) Contemporary (1980s and later), individually produced Japanese films: 53 titles

While this is a small collection of less than 150 films, it can be said to present an “alternate film history” distinct from the mainstream narrative of cinema’s development toward dramatic films shortly after the birth of the medium, and to trace the trajectory of over 100 years of experimentation with “moving pictures,” from the avant-garde cinema that flourished in Europe between the two world wars, to the underground cinema that developed mainly in the United States after World War II, and Japanese experimental films of the same era, and to contemporary film art.

Categories (1) to (3) above contain a number of works that are highly representative of their respective eras

in the history of experimental film, highlighting their close relationship with the art movements of these eras. Meanwhile, many works in category (4) were acquired shortly after their release, including early short films by Naomi Kawase, now recognized as one of Japan's leading director.

Part 3 of the paper enumerates various challenges and issues relating to the utilization and preservation of film art.

Screenings were held at the museum several times a year by Fukada and his successor (myself) starting in 1990, the year after acquisition of film works began. However, these activities were discontinued in 2006.

At present it is possible, though only barely, to offer viewing opportunities by incorporating films into other museum projects, such as screenings related to the Yokohama Triennale and programs featuring films from the museum's collection as a part of the Image Forum Festival. Although it is difficult to show films to the public on occasions other than screenings, due to terms and conditions at time of purchase and copyright issues, works that have come into the public domain in recent years have been digitized, and there have been increasing opportunities for looped screenings as part of the museum's exhibitions of works from the permanent collection.

There are also issues related to film preservation. At present, the museum's films are in good condition, but they are stored in an environment where humidity cannot be controlled, and there is concern that their condition may deteriorate rapidly. We are currently studying options for relocating the films to a temperature-and humidity-controlled location beginning with the museum renovations set for 2021.

While the film collection continues to be managed by the museum's Art Information and Media Center, within the same framework as print publications, it is clear from the purpose of acquisition and the contents of the films that they should be treated as part of the art collection. In the near future, we aim to proceed with the required surveys and procedures to register them in the museum's collection.